高

入学試験問題

国語

（学習用配点 五十点）

二〇二七年度　福島県立高等学校・非公式予想問題

一般選抜対策　試験時間 五十分

全六問

注意事項

一 本冊子は非公式の独自教材である。福島県教育委員会の公式の問題ではない。

二 問題は第一問から第六問までである。問題用紙のページ数を確かめること。

三 解答用紙の受験番号の欄と氏名の欄に記入すること。

四 答えはすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。文や文字で答えるもののほかは、ア、イ、……などの符号で記入すること。

五 字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

六 本文・設問・解答は縦書きである。解答欄は右上から下へ書き、行は右から左へ進めること。

七 設問ごとの配点と採点の目安は、学習用の独自設計である。

第一問

次の（一）、（二）の問いに答えなさい。

注意　字数指定のある問題の解答については、**句読点も字数に含めること。**

＊のついている語には、本文のあとに〔注〕があります。

（一）次の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。また、＝＝線をつけたカタカナの部分を、漢字に直して書きなさい。

(1) 穏やかな春の日差しが、教室の窓辺に届く。

(2) 文化祭の出し物の最終的な判断を、実行委員会に委ねる。

(3) 祖父は、旅の記録を毎日克明に書き残していた。

(4) 抑揚をつけて、詩を朗読する。

(5) 発表原稿の、内容が重なっている部分をハブく。

(6) 地域の歴史を学ぶ機会をモウける。

(7) 新しい主将として、チームをヒキいる。

(8) 性格がタイショウ的な二人が、力を合わせる。

（二）次の各文中の「　」をつけたことわざのうち、使い方が**正しくないもの**を、**ア～オ**の中から一つ選びなさい。

（ア）「石橋をたたいて渡る」性格の兄は、旅行の前日に持ち物を何度も確かめた。

（イ）新しい部長は「船頭多くして船山に上る」で、意見の多い部員たちを見事に一つにまとめた。

（ウ）「急がば回れ」と言うから、慣れない近道より、よく知っている大通りを行こう。

（エ）毎日十個ずつ英単語を覚えたら、「ちりも積もれば山となる」で、一年で語彙がずいぶん増えた。

（オ）「好きこそものの上手なれ」というとおり、絵を描くのが大好きな妹は、みるみる上達した。

第二問

次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
　　正岡子規

B　金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に
　　与謝野晶子

C　白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
　　若山牧水

D　春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕
　　北原白秋

E　みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ＊
　　島木赤彦

F　やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに＊
　　石川啄木

〔注〕　＊二尺：約六十センチメートル。　＊な鳴きそ鳴きそ：鳴くな、鳴くな。　＊外の面：外。
　＊うつろふ：映って揺れ動く。　＊北上：岩手県を流れる北上川。　＊泣けとごとくに：泣けと言うかのように。

（一）次の説明に合う短歌として最も適当なものを、A～Fの中から一つ選びなさい。

　舞い落ちる木の葉を小さな生き物の姿に見立て、夕暮れの光の中の情景をあざやかに描いている。

（二）同じ言葉を重ねて呼びかけ、過ぎていく時間を惜しむような切ない思いを表している短歌として最も適当なものを、A～Fの中から一つ選びなさい。

（三）次の文章は、Cの短歌の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

　この短歌では、空と海という二つの青に囲まれた白鳥の姿が描かれている。作者は白鳥に対して、「 I 」と問いかけている。青一色の世界の中で、どちらの青にも染まることなく「 II 」白鳥の白さは、周りにとけこむことのできない孤独を表していると同時に、何ものにも染まらない気高さをも感じさせる。作者は、そうした白鳥の姿に、自分自身の心を重ねているのだろう。

(1)　 I 　にあてはまる最も適当な言葉を、Cの短歌の中から六字でそのまま書き抜きなさい。

(2)　 II 　にあてはまる最も適当な言葉を、Cの短歌の中から四字でそのまま書き抜きなさい。

第三問

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

能(のう)をつかんとする人、「よくせざらんほどは、なまじひに人に知ら（芸能を身につけようとする人）（なまじっか）れじ。うちうちよく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめ」（内々で）（奥ゆかしいだろう）と常に言ふめれど、かく言ふ人、一芸も習ひ得ることなし。いまだ堅固(けんご)（まったく未熟な）かたほなるより、上手の中にまじりて、毀(そし)り笑はるるにも恥ぢず、つれ（けなされ笑われる）（平然と）なく過ぎて嗜(たしな)む人、天性その骨(こつ)なけれども、道になづまず、みだりにせ（精進する）（素質）（停滞せず）ずして、年を送れば、堪能(かんのう)の嗜まざるよりは、終(つひ)に上手の位に至り、徳（上手な人）（人望が備わり）たけ、人に許されて、双(さう)なき名を得る事なり。（並ぶ者のない）

天下のものの上手といへども、始めは、不堪(ふかん)の聞えもあり、無下(むげ)の瑕瑾(かきん)（下手だという評判）（ひどい欠点）もありき。されども、その人、道の掟(おきて)正しく、これを重くして、放埒(ほうらつ)せ（規則）（勝手気まま）ざれば、世の博士(はかせ)にて、万人の師となる事、諸道変るべからず。（手本）（どの道でも変わらないだろう）

（兼好法師「徒然草」第百五十段）

（一）═══線「恥ぢず」を、現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。

（二）次は、本文について授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

Aさん　「この文章の前半には、二種類の人が出てくるね。一人は、上手になるまでは人に知られないように、こっそり練習してから人前に出ようと言う人だよ。」

Bさん　「筆者は、そういう人は一芸も身につけられないと言っているね。それに対して筆者がすすめているのは、まだ未熟なうちから上手な人たちの中に交じって、『 I 』、平気な顔で稽古を続ける人だよ。」

Cさん　「そういう人は、生まれつきの素質がなくても、才能があっても稽古をしない人より、最後には上手になるんだね。後半では、天下の名人でさえ、始めは II と書かれているよ。」

Aさん　「なるほど。名人も、始めから名人だったわけではないんだね。」

Bさん　「つまり筆者は、 III と考えているんだね。」

(1)　 I にあてはまる最も適当な言葉を、本文（文語文）中か

ら十一字でそのまま書き抜きなさい。

(2) II にあてはまる内容を、二十字以内で書きなさい。

(3) III にあてはまる最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

(ア) 芸を身につけるには生まれつきの才能が何より大切で、才能に恵まれない人は早くあきらめたほうがよい

(イ) 人に笑われないように、上手になるまでは一人で練習を重ね、自信がついてから人前に出るのがよい

(ウ) 未熟なうちから上手な人の中で稽古し、笑われても気にかけず、道の決まりを大切にして続けていけば、才能に恵まれなくても上達できる

(エ) 名人と呼ばれる人は、始めから欠点がなかったので、多くの人の手本となることができた

(オ) 道の決まりにとらわれず、自分の思うままに工夫して稽古することが、上達への近道である

第四問

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（中学二年生の千夏（ちなつ）は、小学生のころから、学校の合唱コンクールでピアノの伴奏を続けてきた。今年、クラスの伴奏者を決める話し合いで、四月に東京から転校してきた陽菜（ひな）も伴奏を希望した。千夏は自分から伴奏を陽菜に譲り、アルトのパートで歌うことになった。次は、五月の合唱コンクールを十日後に控えた日の放課後の場面である。）

音楽室の前まで来たとき、ピアノの音が聞こえてきた。クラスの自由曲「春の道」の伴奏だ。千夏は扉の取っ手に手をかけたまま、耳を澄ませた。

曲が中ほどに差しかかったところで、音がつかえた。左手の和音が一拍遅れて、旋律だけが先に進んでしまう。少し戻って、もう一度。また同じところでつかえる。三度目には、ピアノの音そのものがやんだ。

あの小節だ、と千夏は思った。一番の歌詞が終わり、間奏から二番へ入るところ。千夏も去年、学年合唱で似た曲を弾いたとき、何度もそこでつまずいた。どうすればうまくいくのかも、千夏は知っている。

扉の小さな窓から中をのぞくと、陽菜が鍵盤の上に両手を置いたまま、楽譜をにらんでいた。肩に力が入っているのが、廊下からでもわかった。

千夏は、取っ手にかけた手を、そっと下ろした。

（教えてあげればいいのに。）

もう一人の自分がそう言う。けれども足は動かなかった。伴奏を譲ると言い出したのは自分だ。あのとき、学級委員が「どっちが弾くか、多数決で決める？」と言いかけたのをさえぎって、千夏は笑って手を挙げた。「わたし、もう何回もやったから。今年は陽菜ちゃんに弾いてほしいな。」教室に拍手が起きて、陽菜は何度も頭を下げた。いいことをした、と千夏は思った。思おうとした。

本当は、怖かったのだ。もし多数決になって、陽菜が選ばれたら。転校してきたばかりの陽菜の演奏を、千夏は一度だけ聴いたことがあった。昼休み、誰もいない音楽室で陽菜が弾いていた知らない曲は、千夏がこれまで弾いてきたどの曲よりも、のびやかに響いていた。負けると決まったわけではない。それでも、負けるかもしれない場所に立つより、自分から降りたほうが、ずっと楽だった。

だから今、陽菜がつかえているのを聞いて、千夏の胸のどこかが、

ほんの少しだけ軽くなった。そのことに気づいて、千夏はうつむいた。

「……千夏ちゃん？」

扉が開いて、陽菜が顔を出した。窓越しに目が合ってしまったらしい。

「ごめん、通りかかっただけ。」

「待って。」陽菜は千夏の制服の袖をつかんだ。「お願い、ちょっとだけ聴いてくれない？　二番に入るところが、どうしても合わないの。」

断る理由を探しているうちに、千夏はピアノの横に立っていた。陽菜がもう一度弾き始める。間奏に入り、例の小節に近づくにつれて、陽菜の背中がこわばっていくのがわかった。そして、やはり同じところで、左手が遅れた。

「ね、ここ。」陽菜は鍵盤から手を離した。「家でも百回くらい弾いたんだよ。指は動くのに、みんなと合わせると、絶対ここでずれちゃう。」

千夏は黙って楽譜を見た。陽菜の楽譜は、鉛筆の書き込みで真っ黒だった。指番号、強弱の記号、「ここ注意！」という文字。二十その書き込みのどこにも、歌のことは書かれていなかった。

「陽菜ちゃん、歌のパート、聴いてる？」

「え？」

「ここの間奏の最後で、みんな息を吸うでしょう。二番の頭の『風が』を歌うために。ピアノは、その息に合わせて入るの。楽譜だけ見て、自分のテンポで入ろうとすると、歌とずれる。」

千夏は、去年、音楽の先生に言われた言葉を、そのまま口にしていた。「伴奏は、歌の後ろを歩くんじゃなくて、歌と並んで歩くの。」あのときはよくわからなかったけれど、何度もつまずいて、ようやく意味がわかったのだ。

陽菜はしばらく楽譜を見つめていたが、やがて顔を上げた。「じゃあ、千夏ちゃん、歌って。アルトでいいから。」

「え、一人で？」

「お願い。」

千夏は小さくせきばらいをして、間奏の終わりで大きく息を吸った。そして歌い出す。陽菜の左手が、千夏の声に寄り添うように、すっと鍵盤に下りた。ずれなかった。

二人は顔を見合わせた。陽菜が先に笑い出し、千夏もつられて笑った。

「すごい。百回弾いてもだめだったのに。」

「わたしも、去年そこで何回も失敗したんだ。」

言ってしまってから、千夏ははっとした。陽菜がつまずくのを聞いて、少しほっとした自分のことを思い出したからだ。

「わたしね、」陽菜は鍵盤を見つめたまま言った。「本当は、伴奏に立候補するの、すごく迷ったんだ。前の学校では、ずっと一人でピアノを弾いてたから。誰かと合わせたことって、ほとんどなくて。でも、こっちに来て、まだ友達もあんまりいなくて……ピアノなら、しゃべるのが苦手でも、みんなの中に入れるかなって思ったの。」

二 千夏は、何も言えなかった。自分が「譲ってあげた」と思っていたものを、陽菜はそんな思いで受け取っていたのだ。千夏は、陽菜の演奏に負けることばかり考えていた。陽菜がどんな気持ちでピアノの前に座っているのかなど、一度も考えたことがなかった。

「千夏ちゃんが譲ってくれて、うれしかった。でも、ずっと申し訳なくて。千夏ちゃんのほうが、ずっとこの曲のこと、わかってるもん。」

「そんなことない。」千夏は首を横に振った。今度は、本心からだった。「わたし、陽菜ちゃんのピアノ、好きだよ。前に昼休みに弾いてたの、聴いたことがある。……それにね、わたし、ずっと伴奏ばっかりで、みんなと一緒に歌ったことがなかったんだ。今年は、歌うのが楽しみなの。」

口に出してみると、それはうそではなかった。先週、アルトのパート練習で、隣の子と声が重なったとき、千夏は自分の体が楽器の一部になったような気がしたのだった。

「明日の練習、間奏の終わりで、わたし、思いきり息を吸うから。」

「うん。聞こえるように吸ってね。」

陽菜はそう言って、もう一度、最初から弾き始めた。

帰り道、校門を出ると、西の空に吾妻の山並みが見えた。残雪の斜面に、うさぎの形をした雪の模様が浮かんでいる。種まきうさぎだ。祖母が「あれが見えたら、春の仕事を始めるんだよ」と教えてくれたことを、千夏は思い出した。

四 千夏は、肩にかけた鞄が、いつもより軽いように感じた。道ばたの桃畑では、濃い桃色の花が、夕日を受けて光っていた。千夏は小さな声で、二番の歌い出しを口ずさんでみた。

（この文章は、本教材のために書き下ろしたものである。）

（一）――線一「千夏は、取っ手にかけた手を、そっと下ろした。」とあるが、このときの千夏の気持ちとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

(ア) 陽菜の演奏が少しも上達していないことに失望し、伴奏を譲ったことを後悔する気持ち。

(イ) うまくいく方法を知ってはいるものの、伴奏を自分から譲った立場で声をかけることに、ためらいを覚える気持ち。

(ウ) 陽菜の真剣な姿に圧倒され、自分にはもうピアノを弾く資格がないとあきらめる気持ち。

(エ) 陽菜がつまずいているのは自分のせいではないかと考え、申し訳なさで胸がいっぱいになる気持ち。

(オ) 陽菜が自分の力で難しい小節を乗り越えるのを、何も言わずに見守ろうと決意する気持ち。

(二) ――線二「その書き込みのどこにも、歌のことは書かれていなかった。」とあるが、千夏はこのことから、陽菜がつまずく原因をどのように考えたか。次の文の□にあてはまる内容を、**二十五字以内**で書きなさい。

陽菜は、□ために、二番の入りで歌とずれてしまうのだと考えた。

(三) ――線三「千夏は、何も言えなかった。」とあるが、このときの千夏の心情として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

(ア) 陽菜が転校してきて寂しい思いをしていたことを知り、これまで一度も声をかけなかった自分を責めている。

(イ) 陽菜が伴奏を引き受けたのは自分に気をつかったからだと知り、伴奏を譲ったことを後悔している。

(ウ) 陽菜が友達をつくるために伴奏を利用していたと知り、裏切られたような気持ちになっている。

(エ) 陽菜の思いを知り、勝ち負けばかりを気にして陽菜の気持ちを考えもせず、伴奏を譲ってあげたつもりでいた自分を恥ずかしく思っている。

(オ) 陽菜の演奏の実力が自分よりも上だとあらためて思い知らされ、言い返す言葉を失っている。

(四) 次の文章は、――線四「千夏は、肩にかけた鞄が、いつもより軽いように感じた。」とあるが、このときの千夏の心情について説明したものである。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

千夏が伴奏を譲ったのは、心の底では、負けるかもしれない場所に立つより、［ I ］ほうが楽だったからである。しかし、陽菜と話したことで、［ II ］。そのため、千夏の心は晴れやかになっている。

(1) ［ I ］にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から**七字**でそのまま書き抜きなさい。

(2) ［ II ］にあてはまる内容を、**六十字以内**で書きなさい。

（五） この文章の表現や構成について説明したものとして最も適当なものを、次の**ア～オ**の中から一つ選びなさい。

（ア） 冒頭から千夏と陽菜の視点を交互に切り替えて描くことで、二人の心のすれ違いを客観的に表している。

（イ） 過去の出来事には触れず、放課後の出来事だけを時間の順に描くことで、場面の緊張感を高めている。

（ウ） ピアノの音や息づかいなど、音に関する描写をできるだけ避けることで、二人の間の沈黙の重さを強調している。

（エ） 会話文をほとんど用いず、情景描写を中心に描くことで、千夏の心情を読者の想像にゆだねている。

（オ） 最後の場面で、残雪の山に現れる「種まきうさぎ」や桃の花といった春の情景を描くことで、新たな気持ちで歩み出そうとする千夏の心情を印象づけている。

第五問

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、[1]～[12]は、各段落に付した段落番号である。

[1] 知りたいことがあれば、今はすぐに調べられる。手のひらの端末に言葉を打ち込めば、数秒で答えが返ってくる。昔なら図書館へ行き、何冊もの本をめくってようやくたどり着いた知識が、いつでも、どこでも手に入る。これは、人類がかつて経験したことのない便利さである。

[2] けれども、答えを手に入れることと、それが「わかる」ことは同じなのだろうか。たとえば、「なぜ夏は暑いのか」と検索すれば、「地軸が傾いているから」という答えがすぐに見つかる。しかし、この一文を読んだだけで、地軸の傾きがどのようにして暑さにつながるのかを、自分の言葉で説明できる人はそう多くないだろう。答えは手に入った。しかし、二まだわかってはいない。

[3] では、「わかる」とはどういうことか。私は、それを、知識を地図のようにつなぐことだと考えている。初めて訪れた町で、駅から目的地までの道順だけを教わったとする。教わったとおりに歩けば、確かに目的地には着く。だが、工事で道が一本ふさがれていたら、どうなるだろう。道順しか知らない人は、そこで立ち止まるしかない。一方、町の地図を頭に描いている人は、別の道を選んで目的地へ向かうことができる。

[4] 知識も同じである。一つ一つの答えは、ばらばらの道順にすぎない。それらが互いにどう関係しているかを知ったとき、はじめて知識は地図になる。地軸の傾きと、太陽の高さと、昼の長さとが結びついたとき、私たちは「夏は暑い」ことを理解するだけでなく、「南半球では季節が逆になる」ことまで、自分で導き出せるようになる。わかるとは、教わっていないことまで見通せるようになることなのだ。

[5] ここで、次のような反論が出るかもしれない。必要なときに調べればよいのだから、地図など持たなくてもよいではないか、と。道に迷ったら、そのつど端末に尋ねればよい。確かに、それで用が足りる場面は多い。

[6] しかし、調べるためには、問いが必要である。そして問いは、地図の中からしか生まれない。地図を持っている人は、地図の空白に気づく。「ここから先はどうなっているのだろう」と思うことができる。地図を持たない人には、どこが空白なのかさえ見えない。一何を知らないのかがわからなければ、何を調べればよいのかもわからないのである。

[7] 私の知っているある中学生は、地域の川について調べるうちに、

夏になると川の水位が下がることに疑問をもった。インターネットで調べると、「田に水を引くため」という答えがあった。彼はそこで終わらずに、田植えの時期、雨の量、上流にあるダムの役割を、一枚の図にまとめていった。すると、図の中に一つの空白が浮かび上がった。昔、ダムがなかったころ、人々はどのようにして水を分け合っていたのか。この問いは、どの検索結果にも書かれていなかった。彼は、地域のお年寄りに話を聞きに出かけた。

8 この中学生は、答えを集めることから出発して、自分だけの問いにたどり着いた。答えをつなぐ作業が、新しい問いを生んだのである。ここに、「わかる」ことのもう一つの姿がある。[三]わかることは、知識の終点ではなく、次の問いへの出発点なのだ。

9 もちろん、地図を作るには時間がかかる。答えを一つ手に入れるのに数秒しかかからない時代に、関係を考え、図にまとめ、ときには人に会いに行くことは、遠回りに見えるかもしれない。

10 だが、その遠回りこそが、知識を自分のものにする道である。検索によって得られた答えは、誰にとっても同じ答えである。しかし、それをどうつなぎ、どこに空白を見いだすかは、一人一人違う。地図は、その人の歩いた道の記録でもあるからだ。

11 便利な道具を手放す必要はない。むしろ、道具が答えを運んでくれるからこそ、私たちは答えをつなぐことに力を注ぐことができる。大切なのは、手に入れた答えを、そのまま置いておかないことである。

12 調べることと、わかることのあいだには、小さな隔たりがある。その隔たりを自分の足で歩いて渡るとき、知識ははじめて、自分のものになるのである。

（この文章は、本教材のために書き下ろしたものである。）

（一）――線一「ない」と同じ意味・用法のものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

（ア）今年の冬は、雪が少ない。

（イ）この問題は、それほど難しくない。

（ウ）机の上には、何もない。

（エ）弟は、まだ駅に着かない。

（オ）はかない夢を見た。

（二）――線二「まだわかってはいない」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。**「地図」**という語を用いて、**三十字以内**で書きなさい。

（三）——線三「わかることは、知識の終点ではなく、次の問いへの出発点なのだ」とあるが、どういうことか。**六十字以内**で書きなさい。

（四）7 段落の働きとして最も適当なものを、次の**ア～オ**の中から一つ選びなさい。

（ア） 6 段落までの内容を要約し、筆者の主張を結論として示している。

（イ） 6 段落で述べた考えを、具体的な事例によって裏付けている。

（ウ） 5 段落で示した反論が正しいことを、具体的な事例によって証明している。

（エ） それまでの話題から離れて、新しい問題を読者に提起している。

（オ） 3 ・ 4 段落で用いたたとえの問題点を、具体的な事例によって指摘している。

（五）次は、この文章を読んだあとに、Aさんたちのグループで話し合った内容と、Bさんがまとめたノートの一部である。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

Aさん　「筆者は、ア検索で答えを得るだけでは、「わかる」ことにはならないと考えているね。」

Bさん　「イ道順だけを知っている人は、道がふさがれると立ち止まってしまうというたとえが、わかりやすかったよ。」

Cさん　「ウ問いは地図の中からしか生まれないとも述べていたね。地図を持っていないと、どこが空白なのかもわからないんだ。」

Aさん　「だから筆者は、エ便利な検索の道具は、なるべく使わないほうがよいと言っているんだね。」

Bさん　「オ答えをどうつなぎ、どこに空白を見いだすかは、一人一人違うとも書いてあったね。」

【Bさんのノート】

・検索で得られた答え　……　誰にとっても同じもの。

・知識の地図　……　一人一人違うもの。地図は、I　でもあるから。

(1) 話し合いの中の——線部**ア～オ**のうち、本文の内容と**異なっているもの**を一つ選びなさい。

(2) ノートの I にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から**十一字**でそのまま書き抜きなさい。

第六問

ある中学校の図書委員会では、読書週間に向けて、全校生徒に読書を呼びかけるポスターを作ることになった。ポスターにのせる標語について、図書委員のAさんとBさんが、次の【資料】のような案を出した。【資料】を読んで気づいたことと、全校生徒に読書を呼びかけるには、どのような標語がよいかについてのあなたの考えを、あとの条件に従って書きなさい。

【資料】

Aさんの案

「一冊の本が、きみの世界を広げる。」

・本を読むことで得られるよさを伝えたい。

・短く、力強い言葉にした。

Bさんの案

「朝の10分、本とすごそう。」

・いつ、どのくらい読めばよいかを示したい。

・「すごそう」とやわらかく呼びかけた。

条件

1　二段落構成とすること。

2　前段では、【資料】を読んで、Aさんの案とBさんの案を比較して気づいたことを書くこと。

3　後段では、前段を踏まえて、全校生徒に読書を呼びかけるには、どのような標語がよいかについてのあなたの考えを、理由を具体的にして書くこと。

4　全体を百五十字以上、二百字以内でまとめること。

5　氏名は書かないで、本文から書き始めること。

6　原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。